



ひっぴのだより No.1 2018.4.10

ひっぴ 2年目の春。

田んぼに2年目に早く2年目に草が咲いたことってあったでしょうか。いつもより早いんです。顔を上げてはるきの日も、朝晩とよと寒い日は少し縮まって見えます。

おおきさん、くりさん、まがぼくりさん。春にはってひとのおおきになっておめでとう。おおきくみでもいろいろ一緒に相談してからは、楽しいとてくさん見つめていこうね。

どんぐりさん。ひっぴの仲間へようこそ。お帰りしていました。

まだお家に戻りたくらうたり。お母さんに会いにくらうたりいろいろ泣いていいだよ。涙を拭いてくれるお兄さんやお姉さんがそばにいます。抱っこしてもらいたくならう大人もいます。お原ごらと一緒に遊ばせたら、ちよこ大きくらうね。

ひっぴの大きさは家畜のようには、いつも見守ってくださるお家の皆さま。今年度も一緒に歩んでいってくださるうねいびす。スタッフもさりと仲間も立ちどまり、失敗することだってあるかと思えます。この時と一緒に考え、よい道を探していきたくらうね。子どもたちと一緒に大人も森に預けられたら、ちよこ進んでいけるように。

夏は春めいさきとよと気が急いでいまして、別年と同じく4月1日に、稲の種もみをおくに浸けました。これは春、農作業の始まりの合図のようには毎年この日と決めている仕事です。春休みの中で子どもたちと一緒にこの作業ができていければと残念に思っています。種もみ篩き、しりあき、田植え...とそこから逆算するとこの日にしたいと間に合わない仕事です。ひっぴの倉庫にうら米の秋田こまち1kg、もち米の黒米600グラム、バケツの米に浸し、おひさまの当たる場所に置きます。約半月で1はは根、この種もみの立揃から顔を出した頃、みんな田んぼの苗床にぱらぱらと種もみ蒔きえます。バケツに1杯の種からあの田んぼ一面のたわわな黄金色の稲が収穫できると、想像すると可いことですね。

私が自然農法のことを考えていた時に、故美齊津育夫さんはいとも「〜していい」としておっしゃるに「よく目の前の作物の様子を見ることが、どうしたらいいか作物が考えられる。」とおっしゃっていました。作物の様子でなく、天候や土の具合、水はけや圃場にいる虫などの環境全体と、その作物をよく観察することで、この作物にとってどうしたらいいかを自分自身で考えること。そしていつも「よく〜。」(よくやるよ。)"あ、いい稲だ。"と二言目には褒めてくださっていました。いつも田んぼの広い空の下で作物と話をしながら、何ともゆたかに笑っていられたのは、「〜していいから〜。」というところが、自分で考えられる、そして自分で動かせる、それです。まがぼくりさんやまがぼくりさん...と失敗もいろいろ経験にたどり着いていってからはと見えます。1/3には収穫前のシロカキも沢山食べられて嬉しかった。小夏鳥鳥に一面食べられた日も、「腹が減った〜」と、早くも喜んでおりました。今夜はもうらえと沢山作の合図をあげたいです。一緒に一緒に生きていくからと、と怒りながらも淡々と金と受け入れる大きさ、優しさ。寄り添って一緒に考えたいと、その姿を見出すたびに、今でも田んぼに立つのがうれしくなるように、力がみなぎるように、そして気持ちよく〜。

うら米とよと田んぼや畑で過ごす。これはどうして? どので? 「こうしたいかな。」と、余計な知識や先入観がない分、不思議に思ったりそこからどうしたらいいかを子どもが自分で考えたり、という瞬間がとくさんあります。森で遊んでいって、見つけたものを出会ったことにはいろいろ心を動かされる。好奇心の種のようには、とんぼ姿に出会ったり、傍らにいる大人もこれどうしてござらう? と一緒にわくわくしてきます。今の時代は、知らないことわからないことに出会ったりとくにスマホやインターネットで調べることができたり。でも初めて出会うことは素朴な疑問を抱き、どうしてかなとまず自分で考えることは、様子は好奇心や学びの第一歩であるという気がします。身体全体で感じる感覚を大切にしたい。五感を通して子どもが様々なことに出会い考え姿。そこに寄り添い、ともに喜びながら、大人もどうしたらいいかを自分で考えられる、そんな場でありたい。ここに開く人みんなが心をつなげて互いに育ちあえるように、そしてひっぴの一年にどうしたらいいかと考えています。 : 美和子

田んぼに寄り

まだかまだかと待っていますか... 子羊はまだ産まれません。りんご母さんの食欲はよく具合悪くどうして出産か? と待たわびたいです。お腹の子の心音が聞こえなくて心配しています。あなたもももろの、おまの心音は元気で、もうすぐ産まれますか? 楽しみに待たたいと思います。(今年度は田んぼに寄り、ひっぴのランチレシピも、毎月交互に載せたいと予定します。) : 美和子